



TITLE:

<書評リプライ>佐川徹氏の書評への応答

AUTHOR(S):

岡野, 英之

CITATION:

岡野, 英之. <書評リプライ>佐川徹氏の書評への応答. コンタクト・ゾーン 2017, 9(2017): 423-426

ISSUE DATE:

2017-12-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228336>

RIGHT:

佐川徹氏の書評への応答

岡野英之

「巨人の肩の上に立つ」という言葉がある。巨人とは、過去の研究者たちによる〈知の蓄積〉を例えたものであり、その肩の上に立つとは、知の蓄積に対して新たな知見を加えることを指す。この言葉の意味することは、学問の発展は膨大な先行研究に基づいていること、そして、ひとりの研究者が学問の発展に寄与できる度合いはわずかなものに過ぎないことである。本応答ではこの言葉を手掛かりに学問分野を越えて知を蓄積することについて考えたい。

拙著『アフリカの内戦と武装勢力——シエラレオネにみる人脈ネットワークの生成と変容』はシエラレオネ内戦における政府系勢力「カマジョー／CDF」が形成されてから解体されるまでのプロセスを記述している。そのデータは内戦後に実施したフィールドワークおよび聞き取り調査に基づいている。いうまでもなく執筆過程ではフィールドで得たデータの一部を選び取り、再配列をしている。佐川氏が書評の中で問題視しているのは、その再配列の際、筆者が主軸としたのが、(1) PC ネットワーク、および (2) 経済的合理性に基づいた人々の行動であるということである。その手法が「人びとが武装勢力に関与する動機やその背後にある人間関係の多様性や複雑性を過度に切り詰め」ているのではないかと佐川氏は指摘する。

その指摘は筆者にとっても妥当性を持ったものだとは認めざるを得ない。本応答で取り上げるのは、なぜそうした問題点があるのにもかかわらず、筆者が上述の2点を記述の中心としたのかという点である。本書ではPCネットワークがシエラレオネ内戦においてどのような役割を担ったのかについて詳細に記述した。その作業の意義はシエラレオネ内戦に関する先行研究群が学際的なものであったことを抜きには語れない。

社会科学¹の論文を書く際、研究者は「巨人」の全体像を自ら作り上げる必要がある。なぜなら社会科学の議論は自然科学とは異なり、どこまでが解明されていて、どこからが解明されていないかという単線的な思考を許さないからである。ひとつの対象（あるいは社会現象）を考察するとしても、見る方法によって解釈が異なったり、同じ対象を考察す

423

OKANO Hideyuki 立命館大学衣笠総合研究機構 okano.hideyuki@gmail.com

1 筆者は民族誌を書くという作業を社会科学の立場にたって行ってきた。すなわち、実際に起きた事件や出来事を理解するためにフィールドワークをしてきたのである（それに対して、民族誌を通して哲学的な問いに挑んだり、人間の内面に対して考察をしたりするアプローチは人文学的アプローチと呼ぶ）。筆者と同様の立場を取る人類学的研究の代表例としてポール・リチャーズの編著『平和がなければ戦争もない——現代の武力紛争に関する人類学』がある [Richards ed. 2005]。

るとしてもその目的が異なったりする。そのため社会科学の研究者が論文を書く際には、先行研究レビューとして自らの依拠する議論の全体像を描き出すことが大前提になる。社会科学の論文では先行研究レビューが17～18世紀の哲学者からはじまることも多いのもその証左といえよう。いうなれば、社会学者は巨人の全体像を自らの手で素描した上で、肩に乗らなければならない（＝新たな学術的な貢献をしなければならない）のである。

シエラレオネ内戦、そして武力紛争の研究は複数の学問分野によって取り組まれており、その論文も学際性を帯びるものが多かった。その中で筆者は人類学者と政治学の研究に依拠した議論を展開した²。すなわち筆者にとっての巨人は人類学に限られていたわけではなかったのである。筆者が記述の中心軸としたPCネットワークや合理的選択論は政治学で用いられる概念であり、サハラ以南アフリカ（以下、「アフリカ」と表記）の武力紛争を論じるために広く使われている。佐川氏の指摘のように、PCネットワークは合理的選択を前提とした概念であり、その概念における個人は利益の獲得を一義的な目的として行動する主体とみなされる。

その発想を現実とかけ離れた単純化と批判し、詳細な記述が必要であると民族誌的アプローチの有用性をアピールすることは人類学者にとってひとつの手段かもしれない。しかし、シエラレオネ内戦に対する理解が学際的なアプローチで深まってきたこと、そして、それぞれの学問分野は独自のロジックを持ち、目的とするものも異なることを踏まえると、他学問をその目的を考慮せずに否定するという態度を取るわけにはいかない。シエラレオネ内戦の理解を深めるためには、それぞれの学問分野がいかにその作業に貢献してきたのかを理解する必要がある。

政治学の目的は、ある政治現象の要因を見つけ出し（要因は複数の場合もある）、その要因とその政治現象とを結びつける経路を解明することにある〔久米 2013: 6〕。武力紛争の研究でも、武力紛争が起こった要因を特定し、その要因と武力紛争がいかにつながっているのかを論じる。例えば、「為政者を頂点とするPCネットワークは政府高官（高次のパトロン）をコントロール下に置くための役割を果たしていたが、ある政府高官が為政者と対立し、両社がクライアントを動員することで国を二分する武力紛争が発生した」〔De Waal 2014〕、あるいは、「武装勢力の指導者は資源の分配によって戦闘員を動員することで組織を維持している」〔Reno 1995〕というような説明がある。すなわち、政治学者が検討したいのは、PCネットワークという人間関係の束がいかに武力紛争と結びついているかということである。その結びつきを論じる必要以上にPCネットワークについての理解を深めることは政治学のロジックでは必要とされない。

一方、民族誌を書く際には社会生活の全体を把握することが重視され、厚い記述が目指される〔佐藤 1992: 96〕。民族誌は生活全体から社会や文化、歴史を理解しようとする試

2 人類学による研究は内戦の要因となった社会構造を論じる研究（特に首長層についての研究）、あるいは、紛争直後に元戦闘員とともに生活することで記された民族誌が多い。詳細は拙著を参照のこと。

みであるため、部分的アプローチを避ける。ゆえに PC ネットワーク（という一部分）に注目する本書の記述は偏った記述とみなされうる。本書が試みた PC ネットワークを生活のレベルまで掘り下げて記述するという作業は、政治学のロジックでも必要とされておらず、かつ、民族誌としても部分に囚われすぎているとの誹りを逃れることはできない。このことが意味するのは、本書が行った作業は、政治学、あるいは、人類学という特定の学問分野への貢献を考える限り、無意味なものであるかもしれないということである。

しかし、シエラレオネ内戦は、学問分野間の対話を通して理解が深められてきた。その対話を念頭に踏まえると、本書の作業は意味のあるものといえる。第一に、本書による記述は政治学者に対し、PC ネットワークという概念が何を捨象してきたのかを示すことができる。PC ネットワークとはアフリカの武力紛争を広く理解するための概念であり、その目の粗さゆえに有効性を持っている。逆に言えば PC ネットワークはアフリカに広くあてはまる程度のことしか論じられないことを意味する。筆者はシエラレオネ内戦に見られた PC ネットワークの実情を記述することで、政治学のロジックに基づいた考察では描き切れない部分があることを政治学者に示したかった。そのためには政治学の概念である PC ネットワークという概念を受け入れ、その概念で説明された紛争のメカニズムも、解像度をあげて考察すれば多様性や複雑な事情が存在していることを示す必要があったのである。

第二に、本書は PC ネットワークという縦の関係に注目したことで地球規模課題を描き出すひとつの方法を提示した。ジョージ・マーカス（George E. Marcus）は民族誌の記述においてローカル／グローバルという二項対立を乗り越えるためにマルチサイトッド・エスノグラフィ（multi-sited ethnography）という手法が使われるようになったと指摘した [Marcus 1995]。筆者が PC ネットワークに注目したのは、カマジョー／CDF という国レベルの武装勢力の組織構造を描き出し、かつ、中央政府での政治や国外からの軍事支援といかに関わっているかを示すためである。その上で本書はカマジョーの持つローカルな部分も記述している。本書は、数人の幹部、および、一介の司令官から高位に上り詰めた一人の司令官に注目し、彼らが持つ PC ネットワークを辿ることでマクロな側面もミクロな側面も描き出すことに成功した。この試みはある意味マルチサイトッドであり、あえて縦の人間関係に記述の焦点を絞ったからこそ複数のサイトを繋ぐことが可能だったといえる。

筆者にとっての「巨人」とは、政治学も人類学も含んだ学際的な研究であったのであり、その肩の上に立つ作業は、その学際性を無視しては語れない。もし PC ネットワークという概念を「多様性や複雑性を過度に切り詰め」としていると拒絶し、「現象の多様性や複雑性を描く」と表明した上で民族誌的な記述に終始するのであれば、それは人類学者のロジックによる政治学者のロジックの批判に過ぎなくなる。政治学のロジックを受け入れた上で、民族誌的な記述をすることによってこれまでとは異なる形で対象に接近することが可能になるのではないだろうか。筆者はそう考えたのである。かつてスラムについての民族誌を著した社会学者ジェラルド・サイトルズ (Gerald Suttles) は、フィールドワーカーが既存の考え方では理解できないことに直面した際、雑多な方法が無節操とも思え

るやり方で手あたり次第使うとし、そのことを「方法論上のご都合主義」(methodological opportunism)と呼んだ [Suttles 1976: 3]。そのご都合主義がフィールドに対する理解を深めていったのであるとすれば、筆者が行った作業もまたシエラレオネ内戦を理解するために必要なご都合主義であったといえよう。

<参考文献>

久米郁男 2013 『原因を推論する——政治分析方法論のすゝめ』 有斐閣。

佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』 新曜社。

De Waal, Alex 2014 When Kleptocracy Becomes Insolvent: Brute Causes of the Civil War in South Sudan. *African Affairs* 113 (452): 347-369.

Marcus, George E. 1995 Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology* 24: 95-117.

Reno, William 1995 Reinvention of an African Patrimonial State: Charles Taylor's Liberia. *Third World Quarterly* 16: 109-120.

Richards, Paul ed. 2005 *No Peace No War: An Anthropology of Contemporary Armed Conflict*. Athens: Ohio University Press, Oxford: James Currey Ltd.

Suttles, Gerald D. 1976 Urban Ethnography: Situational and Normative Accounts. *Annual Review of Sociology* 2: 1-18.